ハンドボールの「魅力」を活かしたマーケティングの展開

(財) 日本ハンドボール協会理事（常務理事待遇） 大橋 則一

2005年4月より木野・前マーケティング本部長のもと日本ハンドボール協会の運営に携わらせて頂き、更に今年4月からは川上マーケティング本部長のもとでマーケティング副本部長という役職を拝命し、責任の重さを痛感しているところであります。

日本ハンドボール界の悲願である「北京オリンピックへの出場」については、女子はまだ望みを失っていませんが、男子は達成する事が出来ず、協会役員として深くお詫び申し上げます。しかしながら北京オリンピック男子アジア予選愛知・豊田大会の開催にあたり、多大なる支援を頂きました各協賛企業の皆様、大会運営にご協力頂きました地元愛知・豊田の皆様、また会場に足をお運び頂き大声援して頂いたサポーターの皆様、さらには全国各地からご支援頂きましたハンドボール関係者・愛好者の皆様にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

現在、日本ハンドボール協会の協賛企業様は、オフィシャルスポンサー並びにオフィシャルサプライヤーであるアシックス様、全日本空輸様、伊藤超短波様、フレンディア様、エモックエンタープライズ様、また本機関誌の協賛企業様、日本リーグはじめ各大会での協賛企業様等々であります。既存の協賛企業様のさらなる満足度向上、ならびに新規協賛企業様の開拓がマーケティング本部の重要な命題のひとつであると認識しております。

自身に振り返り、なぜこれまで他の競技でなく、ずっとハンドボールに携わってきたのか。それはハンドボールが「大好き」であり、今があるのもハンドボールの「お陰」だと思っているからです。この思いは私だけではないはずです。
ハンドボールの「魅力」をいかにして上手く伝え、競技者・サポーターを増やしていくことが、日本のハンドボール発展のためには不可欠です。10万人会においては10万人を突破しましたが、これは見方によれば非常に魅力的なマーケットが存在するということです。知恵を絞り、協賛して頂く皆様が、「寄附・支援」から「協賛したい！」と思われるようなアイディアを出し、事業運営に邁進して参ります。

全国の皆様には、今後ともご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。

北京オリンピック男女アジア予選大会総括

（財）日本ハンドボール協会強化委員長　蒲生 晴明

2008年北京オリンピック男女アジア予選は、女子が8月26日〜29日までカザフスタンで行われ、男子は9月1日〜6日まで豊田市で開催された。男女アジア予選を振り返って総括する。

1．女子について

女子は、オランダからベルト・バウワー監督を招聘し2年4ヶ月の間、強化してきた。この間に、女子の日本選手がヨーロッパ各国でプロ選手として契約をするようになっていた。その選手達はヨーロッパ各クラブで鍛えられ、代表選手として一段と逞しく成長した。昨年アジア大会で、韓国・カザフスタンに敗れたものの、中国を久しぶりに破って「銅メダル」を獲得した。この流れを今回のアジア予選につなげることが重要であった。

北京オリンピックアジア予選には、韓国・日本・カタールと開催国のカザフスタンの4カ国が参加した。日本は、第1戦が韓国というスケジュールであり、何としてでも勝つことで勢いをつけたかった。その韓国戦は、1点を争う展開となり、終盤までもつれ込み、試合終了数秒前に田中美音子の劇的なシュートで逆転勝利した。韓国フル代表に公式戦で勝つのは、30数年振りという事（アテネオリンピック直前の2004アジア選手権で韓国代表セカンドチームに勝った実績がある）であった。続く第2戦は、地元カザフスタン。後半の16分過ぎまで2点のリードをしたが、その後にシュートを阻まれ、カザフスタンに連続得点されて敗れ、この時点での自力での予選突破はなくなった。最終戦の韓国 vs カザフスタンで、カザフスタンが勝つか引き分ければ、日本の北京オリンピック世界最終予選出場権獲得となったが、韓国が、試合終了数秒前に逆転勝利し、望みも絶たれた。その結果、1位：カザフスタン（北京オリンピック出場権獲得）、2位：韓国（北京オリンピック世界最終予選出場権獲得）、3位：日本、4位：カタールであった。カタールは、国際大会に初出場で実力はまだ低いレベルであったが、数年後には実力をつけてくると考えられるので侮れない。毎回のことだが、アジアハンドボール連盟の大会技術委員会はほとんどが中東勢で、韓国つぶしを意図的にしていた。明らかにカザフスタン対韓国戦は、中東のレフェリーが充てられ、試合開始から考えられないジャッジが繰り返された。点差が開くとごく普通にジャッジし点差が詰まってくると不可解なジャッジを繰り返していた。

いずれにしても、この逆境のなかでも勝てる力をつけなければ、オリンピック出場は可能にはならない。

写真提供・スポーツイベント社

2．男子について

男子は、クロアチアからイビツァ・リマニッチ監督を招聘し、1年5ヶ月の強化を実施してきた。この間、ヨーロッパやチュニジアでのトレーニングゲームや中国での国際トーナメント、愛知県・熊本県でのトーナメントなどで実戦を通して、チームを強化してきた。選手についても、ベテランと中堅、そして若手を起用しバランスがとれてきた。何としても、地元で出場権を獲得する覚悟で挑んだ。

その予選には、韓国・クウェート・カタール・UAE・日本の5カ国が参加した。開幕の第1戦がクウェート vs 韓国の因縁の試合にはヨルダンのレフェリーが充てられた。試合開

最終結果

■女子

順位		KAZ	KOR	JPN	QAT	数	勝ー分ー敗	得点	失点	差	点
1位	カザフスタン		31○32	28○22	44○14	3	2－0－1	103	68	35	4
2位	韓　国	32○31		29●30	45○17	3	2－0－1	106	78	28	4
3位	日　本	22●28	30○29		49○10	3	2－0－1	101	67	34	4
4位	カタール	14●44	17●45	10●49		3	0－0－3	41	138	-97	0

■男子

順位		KUW	KOR	JPN	QAT	UAE	数	勝ー分ー敗	得点	失点	差	点
1位	クウェート		28○20	29○27	29○23	37○26	4	4－0－0	123	96	27	8
2位	韓　国	20●28		30○25	35○14	35○25	4	3－0－1	120	92	28	6
3位	日　本	27●29	25●30		36○25	33○28	4	2－0－2	121	112	9	4
4位	カタール	23●29	14●35	25●36		33○28	4	1－0－3	95	128	-33	2
5位	UAE	26●37	25●35	28●33	28●33		4	0－0－4	107	138	-31	0

始から信じられないジャッジが繰り返され、クウェートが勝利。その日、日本は第1戦、UAEに勝利したものの、気持ちは晴れなかった。この試合からわれわれ日本選手団は、「またか！」の思いであったため、提訴状など作成し、対クウェート戦の準備をした。そして日本の第2戦クウェートは、イランレフェリーが充てられていた。開始から一進一退であったが、終始日本がクウェートを追う展開。後半に、1点差にすること3回、その直後に退場があったり、イージーミスが出たりで追いつき追い越すだけのパワーはなかった。第3戦のカタールには、実力どおり勝利するものの、この勝利でクウェートが最終戦を待たずに予選1位が決定した。北京オリンピック世界最終予選出場権をかけて、日本は最終戦で韓国と対戦。ドイツペアが充てられフェアなジャッジで勝負ができた。この試合も、一進一退で後半に日本が追う展開となり、後半10分に同点に追いつくも、その後イージーなミスから点差を離され、追い越せなかった。

不可解な判定があったとしても日本代表チームの爆発的な力は出ず仕舞いだったのは事実であり、残念な結果となった。

3. まとめ

またしても、アジア予選突破はならず北京オリンピック出場はならなかった。大変申し訳ありませんでした。しかしながら女子については、12月のフランス世界選手権で自力での出場権獲得とIHF世界最終予選出場権獲得ができるので、全力で強化・サポートを継続していく所存である。

アテネオリンピックアジア予選から4年が経過し、4年周期での方針の再検討や代表監督の交代など数々の難題の解決を鋭意図ってきたが、今後は現場の強化育成のみならず、IHF・AHFとの関係強化のために役員の育成派遣など、次のとおり長期的展望にたって実行することが求められる。

①タレントの発掘育成→NTSの安定実施と地域でのタレント発掘育成との関係強化

②現場強化とコーチの発掘育成→2016東京オリンピックに向け、代表選手・スタッフの特別な育成

③IHF・AHFへ役員の派遣→役員改選にともなうIHF・AHF委員会へのメンバー派遣と実行

④IOC・IHFへのアジア情勢の状況説明継続と改善要求→調査委員会設置と調査結果開示提訴

今回、北京オリンピック出場を目指し、ともに闘ったスタッフ・選手、強化にご協力ご支援いただいた各地の皆様、またご協賛いただいたスポンサー各社ならびに日本リーグチーム、さらには男子アジア予選を開催していただいた愛知県ならびに豊田市はじめハンドボール関係の皆様方に対しまして、感謝するとともにお詫びを申し上げる次第です。

開催地から　豊田から北京へ…。必ず夢は叶う。

北京オリンピック・男子アジア予選実行委員　松原 英司

1988年ソウルオリンピック以来、オリンピックの舞台から姿を消した日本代表。前回のアテネオリンピック予選（神戸大会）では負けはしなかったものの、幸運の女神はほほえんではくれなかった…。しかし、あれから4年、世界水準の最高の戦士たちが招集され、日本ハンドボール界の夢を託された。『北京オリンピック・男子アジア予選』その決戦の舞台が愛知県豊田市の「スカイホール豊田」で2007年9月1日から6日に開催された。

2006年12月24日、第1回実行委員会が開催された。奇しくも、この日は愛知県体育館で第58回全日本総合ハンドボール選手権大会（愛知県ハンドボール協会設立60周年記念事業）の決勝が行われ、大同特殊鋼が優勝し、愛知県ハンドボール協会全国優勝150回を達成した日であった。開催地は盛り上がり着々と準備は進められた。

『豊田から北京へ…。必ず夢は叶う。』を合い言葉に、多くのハンドボールファンがつめかけ、スカイホール豊田をチャンピオンブルーで埋めつくされることが、予選突破への近道

だと思われた。2007 年 4 月 14 日には、日本トップリーグ連携機構主催の「ボールゲームフェスタ in 豊田」に日本代表が招かれ愛知県トヨタグループ選抜とのエキジビションゲームが行われ、日本代表選手の溌剌としたプレーにハンドボール関係者だけでなく、多くのボールゲーム愛好者もオリンピック出場への期待をかけた。しかし、観客収容能力 4,500 人を越えるスカイホール豊田を満席にするには、ほど遠い道のりであった。

2007 年 7 月 6 日から 8 日の 3 日間にわたり「JAPAN CUP 2007 TOYOTA GAMES」がリハーサル大会として行われ、2,000 人以上のハンドボールファンが集まった。会場の一画はチャンピオンブルーで染められたが、満足のできる集客ではなかった。日本代表は全勝で終わり、北京への弾みをつけた。しかし、アジア予選本番では、中東を含めた 5 カ国での対戦。アジアでの過去の大会では、目に見えない力が選手達にふりかかることは幾度となくあった。この力を振り払うには、多くのサポーターと客観的なメディアをもって全国ばかりか、全世界に証人をつくらなくてはならなかった。そのため、国内大会では例のないほど、地元の新聞社・テレビ・ラジオに後援をいただき、メディアでの告知取材を依頼した。さらに、大会直前には「Love Hand Festival in Oasis21」日本代表壮行会を行い、多くのハンドボールファン獲得のイベントも実施した。

2007 年 9 月 1 日、スカイホール豊田、開場 2 時間前に長蛇の列ができた。全国から集まったサポーターが、チャンピオンブルー T シャツを着て会場のほとんどを陣取っていた。4,500 人を越える観客がスカイホール豊田に集まった。エントランスでは記念グッズの販売。World Handball Lounge では世界選手権の DVD 放映と共に日本代表の写真展。信じられない光景であった。「いよいよ北京への道は開けた。」と、実感した。

オープニングゲームは韓国 VS クウェートであった。ゲーム開始早々、韓国選手への不可解な警告・退場から始まり、10 分を過ぎたところで、0 対 6 とクウェートがリードした。場内は騒然とした。純粋にハンドボールを愛し、純粋にハンドボールに魅力を感じている大観衆の前で、公然と起こった目に見えない力の醜さ。これまでの、大会準備期間に費やした時間は何であったのか。しかし、この試合の証人は多数いる。メディアも含め、ハンドボールファンの目には、くっきりと焼き付いている。この日、日本代表は UAE に勝ったものの後味の悪い大会初日であった。

9 月 3 日：大会 3 日目、日本 VS クウェート、2,000 人を越える観衆の中で、重苦しい空気の下、試合が始まった。初日の目に見えない力の存在に、選手だけでなく、サポーターも翻弄されていた。純粋な選手への声援は消え、批判の声だけが高まり、真理を見定めることをも奪い取ってしまった。しかし、選手は自己のパフォーマンスを最大限振り絞り、北京への道を自ら掴み取ろうと、藻掻いていた。後半残り 6 分、1 点差に追い上げ場内最高潮となったが、そのまま駆け上ることはできず、2 点差で敗れた。

9 月 6 日：大会 6 日目、日本 VS 韓国、両国とも 2 位での世界予選進出のかかった試合であった。試合前のセレモニーで、国歌演奏を聴く両国選手・応援団の姿を見て、思わず目頭が熱くなった。この最終戦で、たった 1 枚の北京オリンピック出場権をかけ戦うはずだった両国選手。この試合に 4 年もの年月を費やしてきたはずだ。しかし、実際には予選への出場権争いとなった。

結果は 25 対 30 で日本は敗れてしまった。しかし、ノータイムのホーンの音が鳴り、一瞬の沈黙の後、場内は盛大な拍手が湧き上がった。この試合の団結した応援は選手のための声援となり、選手を後押しした。また、韓国の素晴らしいプレーに対しても絶賛した。まさに、ハンドボールのおもしろさ、醍醐味を賞賛したものであった。敗れた日本選手はもとより、韓国選手の活躍も讃えた。さらには、大会を運営した役員にも惜しみない拍手であったように感じた。

北京への道は閉ざされたが、新たな兆しが見えた大会であった。どんな時もどんな所でも、不屈の精神で相手に立ち向かう日本代表選手。真にハンドボールを愛し、選手を心から支えるサポーター。不可解な出来事に対しても、公正を求める日本協会の毅然たる態度。まさに三位一体により、日本のハンドボールはアジアの見えない壁に屈することなく、世界へ向けて発進するだろう。『ここからはじまる、ロンドンへの道』。

記者の眼

広がった韓国との差

東京新聞
堤　誠人

9月1日から豊田市で行われた北京五輪男子アジア予選で、日本は五輪出場の道を断たれた。あきれるばかりの「中東の笛」に目を奪われがちだが、韓国との決定的な差を忘れてはならない。

ともに2勝1敗で迎えた最終日の最終戦。立ち上がりから追う展開となった日本は、後半早々に宮崎らの活躍で一度は18対18と追い付いたものの、残り約10分からの8分間余りで韓国の尹京信一人に7得点を決められ万事休した。

韓国戦で「あと1点」に泣いた4年前のアテネ五輪予選（神戸）から、日本は攻撃力の強化に力を注いできた。監督は松井幸嗣氏からリマニッチ氏へと変わったものの、強化方針は一貫していた。

若きエースの宮﨑が大黒柱に成長。サイドの豊田や大砲候補の門山らも独り立ちした。

ただ、宮﨑にしても絶対的な安定感や信頼があったとは言い難い。5月に右足の腓骨を疲労骨折した影響があったとはいえ、真のエースというには物足りなかったように思う。

守備力は4年前よりも下がった。五輪予選に限らず、流れを失うとずるずると失点を重ねる試合が強化試合でも目立った。

また、苦しい時間帯でチームを立て直す選手がいなかった。中川主将を支えることができたのはベテランの山口ひとり。その中川、山口ともコートにいる時間は長くはなかった。若手主体の脆さを克服することはできなかった。

絶対的なエースの存在と、チーム全体で苦境を乗り切るという強い意志。韓国との差はこの2つだったのではないかと思う。4年前は「ひょっとすれば勝てるかもしれない」と思った私も、今回は同点に追い付いた時でも勝てる気がしなかった。

日本協会の蒲生晴明強化本部長は「大事なところで韓国はきちっと決め、日本はミスをした。その差が出た。手がちぎれてでも相手のボールを止めるとか、そういう意識を子供の頃からしつける必要があるかもしれない」と振り返る。絶対に勝って2位を死守するという意気込みは、明らかに韓国の方が上回っていた。

「中東の笛」によって、世界最終予選の出場権を逃した可能性はある。だが、北京五輪出場を逃したというのは間違いだ。

今後、選手をはじめ現場は「打倒韓国」を目標にし、協会幹部は「中東の笛撲滅」を目指す必要がある。4年後のロンドン五輪予選に向けた戦いは、もう始まっている。

北京オリンピックアジアハンドボール競技大会プレイベント愛知大会雑感

日本車椅子ハンドボール連盟会長　小西 博喜

去る8月20日、標記大会に愛知県ハンドボール協会大会実行委員会・西村亮治副会長を通じ「車椅子ハンドボール競技」紹介の機会が与えられたご配慮には深く感謝申し上げます。車椅子ハンドボール競技を名古屋市内の中心街で百貨店の中庭に仮設コートをつくり、一般人を含めて家族連れの皆さんに観戦していただけたことは大変有意義なイベントでした。

車椅子ハンドボール部門では、近畿福祉大学（兵庫）とドリーマーズ（京都）によって競技が披露されました。特に柔らかいゴーボールの操作、車椅子のストップ・ダッシュ・ターンの基本動作、多彩なパス・シュートなど、安全性の中にもスリリングなプレーの妙味が紹介できたことはよかったです。

試合は21対18で近畿福祉大学が勝利しましたが、車椅子ハンドボール競技のアジア地域、ヨーロッパ諸国における普及活動の拡大を目指そうとする今後の課題に向けて大きな成果を上げることができたと思います。早速チェコ・プラハのタボルスキー教授に報告資料を送付しました。韓国ハンドボール関係者とも交信の方法について検討中です。

Photo Snap

2008
北京オリンピック
男子アジア予選
愛知・豊田大会から

ベテラン山口選手の奮闘振り

宮崎選手のノールックパス

守護神　坪根選手

永島選手の豪快なプレイ

JAPAN を支えた中川キャプテン

会場内にもフォトギャラリーを設置

チャンピオンブルーで埋め尽くした会場

豊田選手の堅実な 7 MT

会場の「スカイホール豊田」

全日本代表メンバー試合開始前の国旗掲揚

門山選手のパワー炸裂

第12回ジャパンオープンハンドボールトーナメント
（第63回国民体育大会ハンドボール競技リハーサル大会）

大会を振り返って

大分県ハンドボール協会理事長　佐藤 喜一

今大会は、来年開催の「チャレンジ！おおいた国体」に向けての、国体リハーサルとしての大会でした。

開催時期が、お盆の最中である上に、他の競技団体の大会と輻輳しており、近年にない猛暑と重なり、特に空調施設に乏しい会場での試合や、移動を伴う悪条件件が多く選手の皆様の健康状態を心配いたしましたが、選手の皆様は暑さをものともしない果敢な戦いぶりで素晴らしい大会となりましたことに感謝いたします。

この大会の特徴は、日頃よりハンドボールの魅力を経験し、面白さや楽しみを味わった選手の集まりで、日々の生活の一部をハンドボールの練習時間に当てながら、生涯スポーツのライフスタイルとしてとらえた仲間の大会でもあり、再会を通して交流しながら旧友と心を暖めるのを目的にしながらのチームスタイルで成立、ハンドボール大好きの愛好者クラブを目指す大会かと思いますので、今後の一層の発展を期待します。

会場では、コート拭きの中高校生の部員に対して選手の皆様から優しい言葉かけていただける等、暖かい心で接していただき他の大会にはない感動を受けていました。これが、勝敗だけでなくクラブチームの皆様自身が、各地で大会運営に携わっている経験と苦労を理解してのハンドボール愛ではないかと思っています。

結果につきましては、男女ともに、岡山国体を契機に強化充実していた「HC岡山」の３年連続優勝から、さらに４年連続優勝を目指しての大会出場でした。

男子は準決勝で昨年日本リーグに所属していた、「ホンダ熊本」に敗れる波乱がありました。本年国体を控えている「HC秋田」が、一戦々調子を上げて決勝に勝ち進み、決勝戦では後半途中まで一進一退の好ゲームを展開しての大健闘でしたが、キャリアと層に勝る「ホンダ熊本」が地力を発揮して、初優勝の栄冠を手にしました。３位決定戦では、「HC岡山」が力を発揮し、「つくば学園クラブ」を大差で破りました。

女子では、やはり常勝「HC岡山」が本命視されていましたが、平成13年度の準優勝、以後は３位に甘んじていた「香川銀行TH」が、本年度は他のチームを寄付けない得点力と総合力で勝ち進み、決勝においても「HC岡山」を大差で破り、念願の初優勝を遂げました。３位決定戦では、「大分コスモビッキーズ」が大健闘し、「小松クラブ」を僅差で破り、地元開催を盛り上げた大会となりました。

本県ハンドボールは、チーム数・競技役員・補助員の不足の中で、指導・養成をしながらどうにか大会を乗り切ることが出来ました。国体会場としての５会場を使用して男子４日間、女子３日間の大会でしたが、他の競技との関係で会場を移動する変則運営を余儀なくされる大会でもありました。

また、会場内外の施設面・人員配置が予算等の節減で８割程度の運営規模で、何かと不便をおかけいたしまして申し訳なく存じております。来年度開催の国体に向けて皆様のご意見を生かしながら、来年の開催に向けて期待できるよう大会運営をして行く所存です。

改めて日本協会・九州各県のハンドボール関係者・競技役員・参加チームの皆様に感謝申し上げるとともに、来年の国体にはご支援、ご協力をお願い致します。また、「チャレンジ！おおいた国体」へのお越しをお待ち申し上げております。

最後になりましたが、皆様のご支援・ご協力で無事に大会を終了することができましたことを、この誌面をお借りして心からお礼申し上げます。

男子優勝チーム ホンダ熊本

ホンダ熊本キャプテン　本多 智幸

今回、ホンダ熊本としては、日本リーグ撤退後初めての大会と言う事で、チーム自体（監督・選手）「どこまで出来るのか？」という不安でいっぱいでした。また、周囲からは優勝をして当然というプレッシャーもあり、深憂の気持ちで大会に臨みました。

大会に入ってからは、今年からチームに加わった、OBの児玉・佐伯・宮城など（11名）がフル稼働し、現役・OBと良い刺激を与えながら1試合1試合戦ってきました。

今大会の最大の山場でもある、準決勝のHC岡山（ジャパンオープン3連覇中）との試合では、立ち上がりは相手ペースで試合が進みますが、中盤からは若松・大井の現役組の活躍で試合の流れを掴み、チーム一丸となって勝利し、その流れのまま決勝では、GK松岡を含むチーム全員得点を挙げて優勝することができました。

今大会は、大分県と言う事もあり会社・地元から沢山の応援を頂き試合に臨む事が出来、チームの実力以上の力が出せて優勝することが出来ました、本当にうれしく思います。

日本リーグから撤退し残念な気持ちはありますが、今後もモチベーションを維持していき、ジャパンオープン2連覇、3連覇とクラブチームをホンダ熊本チームが引っ張って行きたいと思っています。

今後もホンダ熊本ハンドボール部へのご声援宜しくお願い致します。

女子優勝チーム 香川銀行T・H

香川銀行コーチ　小林 直美

この大会での優勝は、毎年目標にしてきました。その長年の目標をようやく今年達成することができ、優勝の瞬間は安堵感でいっぱいでした。

私達は第1回大会から出場しており、今年で12回目となりますが、当初はクラブチームとしての出場でした。第3回大会からは実業団として出場を続け、第7回大会の2位を最高に、優勝をまだ味わったことがありませんでした。当時の私達は戦術やDFシステムに確立したものがあるとはいえず、そんな中、3年前に亀井好弘氏を香川銀行チームハンドの監督として迎えました。そこから徐々にチームのやろうとすることが明確化していき、選手個々の意識も上向きに変化し、日々の練習も更に充実したものになっていきました。以前の試合内容とも比較すると、着実に粘り強くなったと感じました。しかし、優勝に近いチームと言われながらも結果は出ず、『優勝しなければならない』という気持ちは、監督をはじめチーム全員がプレッシャーになっていったことは確実でした。

監督も今まで指揮してきたスタイルも換え、選手の起用等を試行錯誤しながら、今年は取り組んでいきました。

ジャパンオープンを振り返って、4試合すべて20点以上のリードで優勝することができたのは、結果だけではなく、優勝までに至る努力の成果も試合の中でたっぷりと見せたい、そういう思いもありました。優勝という経験を財産にし、そして連覇を成し遂げるという責任感を持ち、香川銀行チームハンドに歴史・伝統をつくり続けていきたいと思っています。

最後に、チーム結成当初からご尽力を頂きました香川銀行・ハンドボール協会関係各位、チームの向上にご支援・ご協力頂きました大勢の皆様に感謝申し上げます。

第34回 全国高等専門学校ハンドボール選手権大会

米子高等専門学校が2年連続3回目の優勝

大会を振り返り

高松工業高等専門学校ハンドボール部顧問　上原 成功

平成19年度全国高専大会ハンドボール競技は、四国地区の担当ということで高松高専が主管校となり、香川県ハンドボール協会の全面的な御協力の下、高松市内の高松市総合体育館および高松市香川総合体育館の２会場をお借りし、８月18、19日の２日間を通して無事に開催することができました。以下、その状況をご報告致します。

全国の高等専門学校は2007年５月１日現在、独立法人国立高専機構に属する55校、公立６校、私立３校の合計64校あり、そのうち42校にハンドボール部または同好会が存在します。それぞれの地区大会（北海道、東北、関東北信越、東海、北陸、近畿、中国、四国、九州沖縄）を勝ち抜いた代表12校が全国高専大会に出場し、大会初日に３チームずつ４ブロックのリーグ戦を行い、２日目に各ブロック勝者４チームが準決勝および決勝を戦います。この様な形式と規模により行われますので、競技で使用するコート数は２コートが必要でかつ十分な数になります。香川県は少年から成年までのどの種別においても全国的な大会で輝かしい成績を残している一方、47都道府県中で最も面積の狭い県であることに比例して登録チーム数や体育館数は少なく、20ｍ×40ｍを確保できてハンドボール競技に対応している体育館の数となると数館に限られます。その中で最大の高松市総合体育館に20ｍ×36ｍ弱の２コートを設営して競技するのが当初の予定でしたが、県協会や体育館関係者のお力添えにより高松市香川総合体育館も確保して頂いて、香川県としてベストといえる正規サイズ２コートを準備できました。また、７月中旬まで香川県は深刻な水不足が続いており、大会当日のエアコンはおろかトイレの使用も危ぶまれる状態にありましたが、その危機が台風通過により解消されたことや、大会期間中においては、猛暑のため連日のように日本中で死者が出る中、両会場ともエアコンを使用させて頂いて大きな怪我人もなく全試合を終えられたことを申し添えておきます。

競技結果については、前年度と同じく米子・豊田・大阪府立・高松の４高専が決勝トーナメントに進出し、決勝戦も前年の決勝戦で接戦を演じた米子･豊田の対戦となりましたが、全試合を通じ圧倒的な力を見せた米子高専の二連覇で大会の幕を閉じました。蛇足になりますが、開催校である高松高専としては、１・２年生４人が中心の弱小チームながら、優勝校に準決勝で敗れたものの18点を挙げ、初出場だった前年度から二大会連続となる３位入賞を果たせたことに大変満足しています。

最後に、競技役員や競技場など香川県ができる最高の条件を準備して下さった横山理事長を始めとする県協会関係者ならびに両体育館職員の皆様、オフィシャルや会場準備でお世話になった高松工芸高校・高松西高校・高松商業高校・香川第一中学校ハンドボール部（順不同）の皆様など、御協力頂いた全ての方々に御礼申し上げ、また、７月の台風や８月の猛暑でお亡くなりになった被災者の方々の御冥福をお祈りし、結びとさせて頂きます。

優勝チームの声　Ⅰ

米子高専顧問　蔵岡 誉司

「全国大会２連覇」という目標を学生が掲げたとき、昨年度優勝のメンバーが残っているチームとしては当然の目標であろうと思いつつも、モチベーションを維持することができるだろうか、という不安が頭をよぎりました。５年生主体のチームであるため、就職活動や進学受験などの進路問題を抱えながら卒業研究も行うという中で、学生が練習に集まるのだろうか、昨年優勝の美酒を味わった学生が更に向上心をもって練習できるだろうか…。

実際、高専においては高学年になるにつれて実験やレポート提出などの負担が大きくなるため、全員がそろって練習を行うことは困難でしたが、幸いにも技術水準を更に向上させたい、という学生の気持ちは持続したように思います。ＯＢの方々の励ましや指導のおかげで、試合内容を反省し次に繋げる意識が芽生えてきたようにも思います。

本大会は予選リーグから、プレーの流れが悪く、ミスも目立つなど学生も歯痒い思いだったようですが、決勝の豊田高専戦の後半になって漸くディフェンスが安定し、その後の速攻やフォーメーションからのポストプレーやミドルシュートが決まり、本来の力を発揮できたように思います。中国高専大会直

前から怪我も重なり、決して満足のいく状態ではありませんでしたが、最後に素晴らしい試合を行ってくれた彼らの「底力」に感激した次第です。

最後に、技術的指導以外に叱咤激励をいただいたＯＢの方々、練習試合等の際にアドバイスをいただいた鳥取県ハンドボール関係の方々に厚くお礼を申し上げます。

優勝チームの声 2　米子高専キャプテン　高力 功

昨年、全国大会を優勝したことからチーム全体が大きなプレッシャーを感じていました。昨年のレギュラーが多く残っていたために、結果を出さないといけない、という気持ちが大きかったように思います。先輩たちのできなかった全国大会連覇、それは「打倒米子」と思って練習してきた他高専に勝利することであるとともに、自分たち自身との戦いでした。

試合に勝っても満足できず、素直に喜ぶことのできない状態…。その中で始まった全国大会でした。予選リーグ、準決勝とチームの状態は良くありませんでした。決勝戦の直前、試合をもっと楽しめとアドバイスをくれたのはＯＢの方々でした。決勝戦では、前半はミスもあり同点でしたが、一人一人の動きは今までと違っていました。そして、努力してきた自分たちの力、仲間を信じて試合ができました。後半、ディフェンスが良くなり、速攻も決まって相手の豊田高専を突き放し連破の夢を成し遂げることができました。

自分自身は、キャプテンをして孤独になることもあったのですが、ＯＢの坂田コーチに助けていただき感謝しています。また、喜怒哀楽を共に分かち合い最後まで一緒にやってきた仲間にも感謝しています。お世話になった顧問の先生方や学校関係者、色々と協力いただいた県ハンドボール協会、練習試合をしていただいた各チームの方々、温かく自分たちを見守ってくれたＯＢの方々全員に感謝しています。

戦評

◆準決勝

米子高専　26（11－6，15－12）18　高松高専

高松のスローオフで開始。開始40秒で高松②管納のロングシュートで先制するも、米子もパスカットを速攻でつなぎ同点。その後高松⑧中川のシュートに対しての反則が2回あり、⑩池田が確実に7ｍスローを決めた。一方、米子は高いディフェンスと堅実な攻めで得点を重ねた。ただ自慢の速攻でパスミス、キャッチミスなどが続き、思うように点差を広げられず、前半を米子11対6高松で折り返した。

後半に入り、1：10、3：30、4：40と高松が得点をあげ、10分過ぎには高松⑪大江のサイドシュートが決まり、2点差まで詰め寄った。その後米子は、③野村、⑰赤井などのスピードとパワーのあるプレーで高松の追い上げを許さなかった。高松①松井の好セーブもあり、完全に自分たちのペースに持ち込むことはできなかった。ただ、最終的には高松の足が止まり始めた。残り5分過ぎからは米子ペースとなり、26対18と米子が8点差をつけて決勝戦に駒を進めた。

豊田高専　17（6－6，11－6）12　大阪府立高専

大阪のスローオフで試合開始。立ち上がり両チームともパスミスやシュートミスなどがあったが豊田⑥市川のポストシュートで先制する。大阪も速攻の得点チャンスがあったが、豊田①キーパの野崎の好セーブに阻まれる。両チームの堅いディフェンスでロースコアの試合展開である。大阪はたまらずタイムをとり、10分過ぎフリースローからようやく1点をとる。その後、両チームとも堅いディフェンスであったが17分過ぎから両チーム足が止まり始め、大阪も着実に加点し、前半を6対6の同点で終了する。

後半に入り、大阪の反則により次々に退場者が出て豊田は加点し、後半6分過ぎで豊田10点、大阪7点であった。その後、大阪⑩池田が果敢に攻めるが、豊田⑬キャプテンの高橋の活躍により着実に加点し、後半19分過ぎ豊田15点、大阪9点で大阪たまらずタイムを取る。豊田はその後もスピードある攻撃を続け、17対12で豊田が決勝に進出する。

◆決勝

米子高専　29（11－11，18－4）15　豊田高専

立ち上がり米子高専はリズムよくセットプレーや⑤キャプテン高力などの速攻で10分過ぎには6対2とリード。その後豊田高専も⑬キャプテン高橋のカットインやロングなどで3連取し、一進一退の攻防が続く。前半終了直前に、豊田高専の②黒部がパスカットから速攻を決め、前半を11対11で折り返した。

後半に入り、米子は① GK 谷本の好セーブや⑤高力、④石賀の速攻などで8分過ぎまでに5連取。すかさず豊田はタイムをとるものの、米子の勢いは止まらずセットプレーやスピードある速攻で15分過ぎには10点差に。豊田も⑬高橋や②黒部らのコンビプレーや1対1で対抗するも、米子① GK 谷本の好セーブや足を使った米子の DF の前にリズムを崩され、終わってみれば29対15であった。

第15回 日・韓・中ジュニア交流競技会ハンドボール競技

総 評 …… 選手団団長　氷海 正行（全国高体連部長）

1．目的

アジア近隣諸国との青少年スポーツ交流を促進し、これを通じて相互理解を深め、競技力向上に資するため、日本、韓国の競技者を中国に招聘し競技会を開催する。（陸上・サッカー・テニス・バレー・バスケ・ウェイト・ハンド・ソフトテニス・卓球・バドミントン・ラグビー）

2．参加国　①日本　②韓国　③中国　④桂林市（開催地）

3．派遣期間

平成19年8月23日（木）～8月29日（水）7日間

競技期日：8月25日（土）～27日（月）

4．競技会場　中華人民共和国・桂林市スポーツセンター

5．試合結果

■男子（桂林市は参加なし）

日本　37（18-18，19-13）31　韓国

得点：信太12、新名、成田9、加藤、嶋崎3、山本1

韓国　52（22-14，30-26）40　中国

日本　41（19-13，22-14）27　中国

得点：信太13、新名8、植垣、成田、土井6、加藤、小林1

■女子

桂林　27（12-7，15-16）23　中国

日本　27（15-9，12-13）22　韓国

得点：田邉8、乾7、塩見、島岡、翁長、太田3

日本　34（15-11，19-13）24　桂林

得点：田邉7、乾6、翁長5、島岡、飯田3、塩見、増田、森脇、太田、前2

韓国　27（13-16，14-8）24　中国

韓国　30（11-13，19-5）18　桂林

日本　37（20-13，17-13）26　中国

得点：乾7、翁長6、田邉5、塩見、島岡4、増田、太田3、飯田、前2、森脇1

6．試合内容

日本 vs 韓国（男）…日本のディフェンスは6－0で韓国のフェイント攻撃に対応するように間を狭くして守った。攻撃は韓国のディフェンス3・2・1に対してアグレッシブに前にきた時は1対1で、下がって守った時は前からのミドルシュートで得点を重ねた。

日本 vs 中国（男）…日本のディフェンスは3・2・1で中国の長身選手の攻撃に対応するように前後に厚く守った。攻撃は中国の長身選手のスタミナ不足を突いて、速攻から得点を重ねた。

日本 vs 韓国（女）…日本のディフェンスは韓国より身長が高いので6－0でフェイント攻撃に対応するように間を狭くして守った。攻撃は韓国のディフェンス3・2・1に対してアグレッシブに前にきた時はポストシュートで、下がって守った時は前からのミドルシュートで得点を重ねた。

日本 vs 中国（女）…日本のディフェンスは基本的には6－0で守り、短時間に5－1で中国の長身選手のパスのリズムを崩すように守った。攻撃は中国の長身選手のスタミナ不足を突いて、速攻から得点を重ねた。

日本 vs 桂林（女）…桂林チームは中国チームと同様のスタイルであり、日本のディフェンスは基本的には6－0で守り、短時間に5－1で桂林の長身選手のパスのリズムを崩すように守った。攻撃は桂林の長身選手のスタミナ不足を突いて、速攻から得点を重ねた。

8．交流を終えて

15回目になる日・韓・中ジュニア交流競技会は、中国の桂林市で8月23日～29日まで交流会が行われました。今大会で男女共に全勝で優勝したのは日本選手団の中でハンドボール競技だけであり、とても誇りに思います。そして、大会初日に女子が韓国に勝利したことは、男子チームにも勇気を与えました。

今回は男女共に選抜チームにも拘らず、各選手は自分が何をやればよいかの精神的な迷いがなく、チーム一丸となって打倒韓国を目指して戦うことができました。このことは男女共監督・コーチの各選手に対する役割の指示が明確であり、選手との意思の疎通が見事にとれていたからだと思います。男女共に全試合を通して感じたことは、スタミナと速攻の技術は日本が優れていたということです。各ポジションのスペシャリストを選抜しており、チームバランスも良かったです。遠征直前の大阪での合宿と大会を通して、男女共すばらしい選抜チームにされた監督・コーチ・選手の皆さんに感謝します。最後になりましたが、この交流会が無事に終了できましたことを、各選手のチーム監督及び各関係機関の皆様に心より感謝申し上げます（平成20年開催は日本の千葉市で行われます）。

参加者の声：「第15回日中韓ジュニア交流競技会」に参加して ……

■男子

男子コーチ　大房 重則（高岡向陵高等学校）

「第15回節目の日中韓ジュニア交流競技会」は中国桂林市で行われた。男子は全国選抜大会にて優勝した藤代紫水高校から主軸となる5人、日本は両エース成田・キャプテン信太、ポスト嶋崎・小林、機動力あるセンター新名・寺田、左腕加藤・植垣、左サイド土井・平山、7mスロー山本、5―1ディフェンス中国戦の野間、堅実なキーピングのGK 2年生トリオ木村・大鶴。「選手14名に一言」「全国高体連の先生方で選考された選手は自分のポジションで最大頑張れ。結果が負けであっても責任は選考者の選任である!!」と激励した大阪高体連の関係者のもと、直前合宿（2泊3日）でお世話になった関西大学、大商学園高校のご協力に感謝申し上げます。

試合日程については6泊7日2試合ですから強行軍ではありません。しかし、選手は食事に悩まされ、体調を崩す者が続出

した。今年度№１の韓国・中国チーム。初戦の韓国戦は一線ディフェンスからアタックが機能し、前半立ち上がりから互角の勝負となり、両エース信太・成田、センター新名、フローター陣の活躍もあり、要所を締めて相手に主導権を与えず、守りからの速攻も冴え 18 対 18 の同点で前半を折り返した。後半も一進一退の攻防も続いたが、ファインセーブの GK 木村、サイドシュートの平山、加藤の速攻、７ｍスロー山本で加点、嶋崎の光るポストシュートなどで連続得点し、粘り強い積極的な韓国チームに６点差で勝利を収めた。

第２戦の中国は長身選手を揃えて臨んできた。195 センチ台が３名で、他の全員が 190 センチを越えるチームだった。大型攻撃陣の３回の顔面シュートを GK 大鶴が好セーブしてチームにアピール。野間をトップに置く５―１ディフェンスで守り、サイドから回り込むミドルシュートの植垣、スカイプレーの土井、センター新名からポスト小林の多彩な攻撃により、19 対 13 のスコアで前半を折り返した。後半に入っても日本の両エースの豪快なロングシュートやセットオフェンスでも立て続けに点をとるなど、ディフェンスシステムが機能した。中国も次第に集中力が切れ、徐々にペースを乱し始め、足が止まって 41 対 27 で大量リードを保ったまま勝利した。

この日・中・韓のジュニア交流競技会に選考され参加した全国高体連日本代表 14 名のプレーに将来性を感じさせられた。彼らにとって大きな誇りと自信になったと思う。将来の日本を担う選手として、彼らの今後の活躍を期待したい。

最後に「ありがとう」を言いたい。

信太 弘樹（茨城県立藤代紫水高等学校３年）

８月 24 日から８月 29 日まで「第 15 回日・韓・中ジュニア交流競技会」が中国・桂林で行われました。

日本チームは韓国・中国に苦戦を強いられたものの、全試合勝利することができました。

初戦は韓国との対戦でした。韓国のオフェンスは速いパス回しから、ディフェンスが位置をとる前、もしくは手が上がる前にスタンディングシュートなど、様々なタイミングでシュートを打ちこんできました。日本にはそのような攻め方をしてくるチームがあまりないので、対応するのに難しく多少時間がかかりました。しかし、プレッシャーをかけたディフェンスで韓国に対応し、速攻で得点をあげることができました。セットオフェンスでは、韓国の積極的なディフェンスに対して常に一人一人が前を狙い、確実にシュートを決めることができたと思います。

次の相手は中国でした。中国は平均身長が 180 センチを超える大型チームでした。日本はミドルシュートでの得点は阻まれましたが、速攻やカットインで加点しました。

今回の交流競技会で韓国・中国に勝利できたことは、日本のハンドボール界に明るい話題をもたらすことができたと思います。この交流競技会で私はハンドボールを国内だけでなく外国の選手とプレーすることができ、とても貴重な経験となりました。この経験をいかしながら、これからもプレーしていきたいと思います。

木村 昌丈（茨城県立藤代紫水高等学校２年）

８月 24 日から８月 29 日まで行われた「第 15 回日・韓・中ジュニア交流競技会」に自分はゴールキーパーとして参加しました。中国や韓国と試合をする中で様々なことを学びました。

韓国の選手は動きが速く、位置取りをとるのが大変でした。日本のシューターは３歩使ってジャンプシュートを打つのが多いです。しかし、韓国のシューターはそれをほとんどしませんでした。速いパス回しから１歩もしくは２歩でスタンディングシュートやランニングシュートを打ってくるのがほとんどでした。それもディフェンスの顔の横など見えないところから足元など、下を狙ってこられたので、ものすごく取りにくかったです。韓国の選手のシュートテクニックの豊富さ上手さに驚かされました。

中国の選手はとても大型でシュートスピードもありました。細かいプレーは無かったのですが、とにかくシュートの打点が高く、ずいぶん苦しめられました。

韓国・中国ともに全く違うプレースタイルでしたが、60 分の試合の中でどちらのチームにもうまく対応し、勝利できたことを嬉しく思います。

今回の「日・韓・中ジュニア交流競技会」で学んだことをいかし、これからもハンドボールに励んでいきたいと思います。

■女子

女子監督　河先　修（栃木県立栃木商業高等学校）

「高校選抜チーム」でこの競技会に臨むことを決めてから、今回で４度目の「日・韓・中ジュニア交流競技会」となりました。今回もこれまでと同様、３月末の全国高校選抜大会で活躍の顕著だった選手と、各ブロックからの推薦選手（男女各 30 数名）の参加を募って、４月下旬に選手選考会を実施しました。過去、このジュニア交流競技会が国体のブロック大会やナショナルチーム（ユース代表）の活動と時期が重なり、思うようなチーム編成ができないことがありました。しかし、今回は選手の所属チームのご協力で過去にない最強のメンバーでチームを編成することができました。出発前、大阪で実施した２泊３日での練習会。集合前日まで国体のブロック予選を戦い抜いてきた選手達に疲労の色が見えました。これから「選抜チーム」として戦うとき、「コンビネーション不足」を敗戦の理由にしないことを選手と約束し、個々のパフォーマンスを十分発揮するための練習を短時間で繰り返しました。そして、これまでの交流競技

会での苦い思い出を払拭したい想いと、このメンバーで負けることは許されないという想いを胸に競技会に臨みました。

そして迎えた初戦はこれまでの交流会で勝つことのできなかったライバル韓国。試合開始から、選手達はのびのびと自分たちの力を存分に発揮してくれました。「堅くなって緊張し、ミスから失点を重ねるのではないだろうか」というスタッフの想いは、つまらぬ余計な心配でした。後半、韓国の猛烈な追い上げにも選手達は落ち着いて対処し、これまでどの世代でもなかなか勝つことのできなかった韓国に完勝することができました。試合終了後、喜びを体いっぱいで表現しあっている選手達を誇らしく思えたことが忘れられません。競技会２日目の開催地「桂林」、そして３日目の「中国選抜」も 180 ㎝をこえる選手が多数を占める大型チームでした。体格・体力にものをいわせて、攻めまくってくる相手でしたが、韓国に勝ち、自信を持った今年の日本は圧勝することができました。ただし、中国は年々、大型選手を着実に強化しチーム力を向上させています。まだまだ簡単なミスが多く、今、日本チームが負けることはないと感じましたが、今後の活動次第では恐ろしい強敵になることを実感しました。

中国・桂林、市内の中心を流れる璃江、その両岸の奇峰・奇岩が連なる山水画のような独特の風景の中で日本の選手団の一員として競技会に参加し、全勝で帰国する事ができ、さらに他競技の方々や他国の方々と交流を深める機会をくださった多くの皆様に感謝申し上げます。これを機に、参加した選手はますます成長してくれることを確信いたします。

大場 帆海（文化女子大学付属杉並高等学校２年）

大阪合宿を含め９日間、私はたくさんの貴重な経験をする事ができました。

私たちは３年生 12 人・２年生２人、計 14 人の選抜チームとして編成されました。

初めは先輩方と打ち解けられるのか、私なんかがこの場にいて良いのかなどいろいろと考えこんで腹痛に襲われたりもしました。しかし先生方が、「遠慮はするな」「今もっているものを出せば良い」と声をかけて下さり、このままだとせっかくの貴重な経験を台無しにしてしまうと自分自身、気が付くことができました。

試合は、なんと強豪韓国チームに５点差で勝利し、良いスタートが切れました。

その後の桂林戦、中国戦もそのまま勢いに乗って大差で勝利をつかみとり、なんと３連勝することができました。この交流会で韓国に勝ったのは初めてだと聞き、喜びは一層深まり、さらに盛り上がりました。

私はほとんどベンチにいましたが、試合を見ながら、やはり韓国の１人１人のフェイント力はすごいと感じました。私と同じで身長が高いわけでも足が長いわけでもないのですが、キレのあるフェイントや切り返しのタイミングで身長の高い選手を抜いているのを見て、とても勉強になりました。先輩方も、いつもは対戦する同士ですが、今回は同じチームとしてそれぞれの特色が発揮されていて、たくさんの迫力あるプレーが見られ、私はベンチで感激していました。

今回初めて日本代表としてハンドボールに接し、この様な競技会に参加できたことを本当に嬉しく思います。中国は、料理の味や生水が飲めないなど、日本との文化の違いがあり多少とまどった事もありましたが、それも１つの良い経験となりました。

最後は各国の代表チームが踊りや歌を発表し合い、交流を深めました。私たちハンドボール女子も歌と踊りを披露しました。あんなに冷や汗をかいたのは初めてだというぐらい緊張しましたが、観客のテンションも見方につけ大成功しました。

熱心にご指導して下さった先生方、２年が２人ということで色々と気を使って下さった３年生、シェイシェイとニーハオしか言えない私を助けてくれた通訳さん、

本当にありがとうございました。この経験を無駄にしないよう、これからも頑張ります。

田辺 夕貴（京都府立洛北高等学校３年）

私は今回、中国の桂林で行われた、「日・韓・中ジュニア交流競技会」に参加させていただきました。日本で３日間練習をして、中国へ出発しました。全国から集まった代表の選手で一つのチームを作って戦うので、まずコミュニケーションをとることからはじめました。練習の中でお互い意見を言いあった結果、新しいプレーが生まれることもありました。また外国での試合ということで、特に食事面など体調管理には十分気をつけ、慣れない環境の中でどれだけパフォーマンスできるかが重要でした。試合では相手チームとの体格の差が大きかったので、チーム一丸となって工夫してプレーすることを心掛けました。

自分たちの最大の山場はやはり韓国戦でした。先生方も“打倒韓国！”と言われていてここ数年勝っていないと聞いていたので、“勝ちたい”という気持ちがより一層強くなりました。韓国の選手の体格はそれほど大きくありませんでしたが、フェイント力など個々の能力が優れており、スピードについていくことが難しかったです。私達は一人一人の長所を生かし、また個人プレーだけでなく、お互い声を掛け合い、チームプレーに徹することができました。その結果、私達の最大の目標であった韓国に勝利し、その他の試合でも全て勝つことができました。

私たちは、この交流会を通して多くの事を学びました。試合に勝つことだけでなく、自分達とはまた違うプレースタイルなども学ぶ事ができました。また他国との交流も深められ、良い経験をさせていただく事ができました。この経験をこれから生かしていきたいと考えています。

～「今」に便乗しよう～

企画・広報委員
早川　文司

日本の悲願はまたも届かなかった。北京五輪アジア予選、女子は今冬の世界選手権（フランス）にわずかな望みを託すことになったが、男子は寂しく幕を閉じざるを得なかった。

今回もまた「中東の笛」が問題となり、日韓両国はレフェリー問題をレポートにまとめ12月の国際連盟に提出して是正を求めることを申し合わせた。しかし、これとは別に国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）にも実情を報告することも検討すべきではないだろうか。五輪予選はＩＯＣが関知する大会であるからだ。

しかし「中東の笛」うんぬんと言っても何も解決するわけがないことも事実である。３大会続けて日本開催を招致した熱意は理解できるが、果たして、それだけで解決するものではないことは、大方の人が分かっていたようだ。

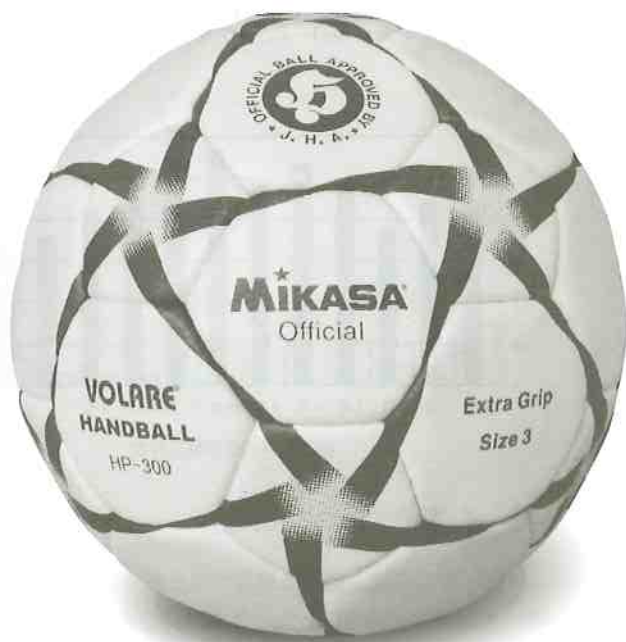
周辺の人たちも「展開」を読めていたという。女子の韓国戦も「中東戦略」とはっきり言う人もかなりいた。

「別に驚きはなかった。韓国に勝つと思っていた。それがカザフスタンの戦略なのだ」。

こうあっさり片づけられては、少々白けるが、冷静に考えてみれば、事情を知り尽くしたコメントだろう。

やはり日本がもっと力をつけることが、まずは再生の第一歩ではなかろうか。男子の韓国戦にしても、追いつくのが精いっぱいだった。善戦したのは確かだが、その域を出ない実力はいかんともしがたい。どうすれば危機を脱出できるか。その打開策の一つは、日本リーグなどの試合数の拡大だろう。

スケジュールはタイトになるが、まずはそれに耐え得るフィジカル面、勝負への執着心を養うことが世界への道にもつながるような気がする。地力をつけて中東勢に対抗することは今後の重要な対策であろう。

危機脱出策はファンの増大も重要だ。新しいファン獲得作戦をどう進めるか。きびしいファンの目が多くなれば、選手のプレーは向上するはずだ。停滞は一時も許されるものではない。来年１月には宮崎で日本リーグがある。「経験者」で今、売り出し中の知事に便乗し「ハンドボール大使」としてファン獲得に協力願うこともあっていいのではあるまいか。（夢かな～。）

平成19年３月17日・18日の両日、駒澤大学において、第５回ハンドボールコーチング研究会が開催されました。研究会の発表について、本誌で連載報告していただく運びとなりました。
今月は、花岡美智子（東海大学）先生の発表内容「ハンドボールにおける傷害発生状況―５年間の継続的調査より―」を報告させていただきます。なお、他の発表については次号以降で順次報告いたします。

(財)日本ハンドボール協会指導委員会研究部会　舎利弗　学（学校法人福島高等学校）

ハンドボールにおける傷害発生状況

―５年間の継続的調査より―

花岡美智子（東海大学）

キーワード：ハンドボール、傷害、サーフェイス

1．研究目的

ハンドボールはルール上コンタクトが許されているスポーツであり、跳・走・投の運動要素が盛り込まれた激しい競技である。その競技特性により、傷害の発生頻度が高い競技の一つであるといわれ、中でも下肢の傷害発生率は高いことが報告されている[1)、2)]。特に足関節捻挫、膝前十字靭帯の損傷は多く発生しており、その後の競技生活に多大な影響を及ぼすことも少なくない。しかし他の競技と比較してハンドボールにおける傷害に関する研究は少なく、傷害に対する予防法や対応策が乏しいのが現状である。そこで本研究ではハンドボールにおける傷害発生状況を調査し、その傾向を明らかにするとともに、特に傷害が発生する時期に注目し、シーズンにおける細かなコンディショニングを立てていく上での一助となることを目的とした。

2．方法

関東学生リーグ一部に所属する大学女子ハンドボール選手のベ80名を対象とし、週に１回のペースで傷害調査(アンケート、質問）を行った。調査期間は1999年４月から2003年３月までの５年間とした。

外傷に関しては、医療機関において医師の診察が必要になった事例を対象とし、障害に関しては練習に影響を及ぼす（パフォーマンス低下を引き起こす)状態に至ったものを対象とした。

3．結果

3―1．外傷

５年間に発生した外傷は223件であった。最も多く外傷が発生した部位は足関節・足部46件（20.6％）であり、次いで大腿部であった（図１)。また発生した外傷の中で最も多かったのは足関節靭帯損傷40件（17.9％）であった。これらの外傷は練習中に受傷したものが117件（52.5％）と最も多く、試合中に発生した件数は66件（29.6％）であった。受傷発生時期に関しては、８月が最も多く33件（14.8%)、次いで11月29件（13.0%)、４月28件（12.6％）であった。(図２)

3―2．障害

５年間に発生した障害は312件であった。最も多く慢性的に痛みを訴えた部位は肩関節48件（15.4％）であり、次いで腰背部、膝関節と続いていた。痛みを感じる時期としては、11月が最も多く、次いで10月、８月の順で多かった（図２)。痛みが３ヶ月以上続く長期間の障害としては膝関節26件、肩関節22件、腰部19件の順で多かった。

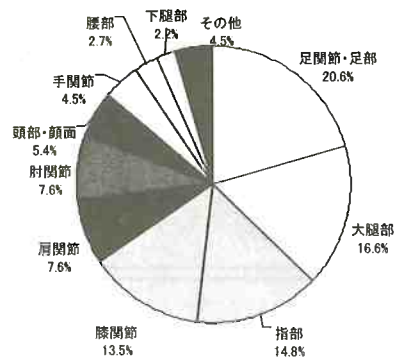



図１　部位別外傷発生件数

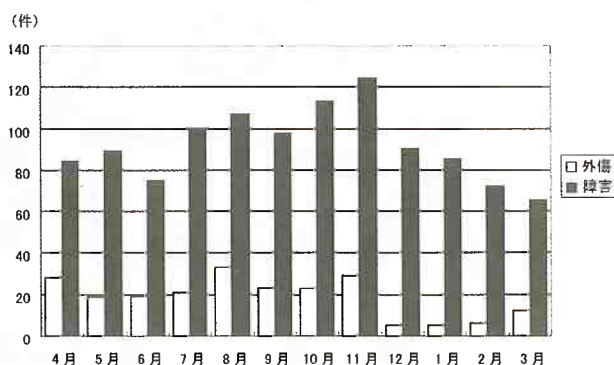



図２　月別傷害発生件数

4．考察

外傷に関しては、足関節捻挫が最も多く発生しており先行研究[1)]と同様の結果を示した。膝関節部位の損傷は30件であったが、そのうち手術を行ったのが５件、さらに障害において長期にわたり膝に痛みを訴えているケースの多くが外傷を契機にしているものが多く、後の競技活動に影響を与える可能性が

高い部位であることが示唆された。

また発生時期に関しては、11 月、10 月、8 月に多くの傷害が発生していた。Seil ら[1] や Olsen ら[3] は、1000 時間当たりの傷害発生件数は練習時が 0.8 件であるのに対し試合時には 13.5 件と試合時の傷害発生率が有意に高いことを報告している。本研究でも受傷件数が多い 11 月、10 月、8 月は公式戦が組まれている時期であり、試合を多く行う時期に傷害発生の危険が高まることが示唆された。

傷害の発生要因には個人の筋力や柔軟性、アライメントなどが原因となる内的要因（個体要因）と、個人を取り巻く天候や気温、サーフェイスやトレーニングの質量などが原因となる外的要因の大きく２つが挙げられる。試合に対する独特の緊張感や過剰な興奮状態は、個体内の心理的要因に影響を与え、通常と異なるパフォーマンスの発揮を促し、それにより身体のバランス不均衡や過剰な負荷活動、運動コントロールの不制御などが引き起こされ、傷害が発生するのではないかと考えられる。

またこの時期は試合や大会前の合宿など、通常の練習場所とは異なる環境下で動く機会が多くなり、外的要因の複数の因子が変化する可能性が高い。それが傷害発生の原因の一つになっていると考えられる。その外的要因の一つであるサーフェイスは、素材の違いにより地面反力や、靴と接地面との摩擦係数が変化する。摩擦係数が高い場合、下肢の外傷受傷率が増すことが Olsen ら[4]によって報告されている。接地面が硬い場合には、ハンドボールにおいて重要なストップやターン、カッティングなどの動作時に、強い衝撃が足部に加わり下肢への負担が強くなることが予想される。また地面反力が強く、スピードに乗ったジャンプや切り返しが可能となる反面、受傷時には重篤な傷害になる危険性が高くなることも考えられる。

プレーヤーは地面反力や摩擦係数の違いに対してプレーの強弱、スピードなどを微細に調整し、対応していく能力が必要となるが、ウォーミングアップなどの準備不足や疲労の蓄積、能力の未成熟などにより、その対応が出来なかった場合に受傷率が高まるのではないかと思われる。

慢性的な痛みを訴える障害は、練習を中断するほどの重症度はほとんど見られず、痛みを訴えながらも練習参加が可能な程度のものが多かった。そのため試合が近づくにつれ、多少の痛みでは練習を休むことを選択せず、痛みを訴えながらも練習に参加するケースが多く見られた。部位としては、競技において

頻繁に使用する部位が多く、十分な休養、治療を行うことが出来ない状態で試合に臨んでいることが示唆された。

試合前のトレーニング計画としては、鍛錬期（シーズンオフ）よりも量を落としていくケースが多く、今回対象としたチームにおいても外傷、障害が多く発生している 11 月、10 月、8 月の練習量が極端に増加したという事実は見られない。つまりプレー時間の多さよりも、プレーの質が傷害発生に大きな影響を与えており、さらに活動する環境が頻繁に変化することが傷害を引き起こしやすい状況を作っているのではないかと推察される。

試合における緊張感は、練習中に出そうと意識していてもなかなか出せるものではない。個人差も大きく画一的な対策を立てることは難しい。

チームとして対策を練る場合には、環境の変化に対して、その中でも特にサーフェイスの変化に対して対応を練ることにより下肢を中心とした傷害の発生件数を減らすことが出来るのではないかと思われる。

【参考文献】

1）Seil R,Rupp S ら (1997), Injuries during handball. A comparative retrospective study between regional and upper league teams, Sportverletz Sportschaden.11(2):58-62.

2）Langevoort G, Myklebust G ら (2006), Handball injuries during major international tournaments. Scand J Med Sci Sports.12

3）Olsen OE,Myklebust G ら (2006). Injury pattern in youth team handball :a comparison of two prospective registration methods. Scand J Med Sci Sports.16(6):426-32

4）Olsen OE,Myklebust G ら (2003), Relationship between floor type and risk of ACL injury in team handball. Scand J Med Sci Sports.13(2):299-304

北京オリンピックハンドボール競技 男子アジア予選愛知・豊田大会のアンチ・ドーピング

Asian Men's Qualification for Beijing Olympic Games (30 August ～ 7 September/07)

IHF/AHF/MC委員　西山逸成

標記大会は、2007年9月1日～6日の間、スカイホール豊田において、韓国（KOR)、クウェート（KUW)、アラブ首長国連邦（UAE)、カタール（QAT)、日本（JPN）の5カ国総当たり戦で実施された。

1．大会におけるアンチ・ドーピング活動；

平成17年8月に標記大会の豊田市実施が決定されて以降、アンチ・ドーピング活動の計画・準備としてドーピング・コントロール(以下、ドーピング検査）要員の確保・養成がすすめられた。

1）ドーピング斑員の養成・確保—ドーピングコントロールオフィサーとシャペロンの養成・確保のため、平成18年度全日本総合選手権、全日本学生選手権および平成19年度のジャパンカップ豊田大会（H19年8月）等の活用による要員講習を実施した。要員としては、中京大学、名古屋工業大学の男女学生等であった。

2）大会のドーピング検査斑の編成・組織；

ドーピング検査責任者：西山逸成（AHF医事委員長）
検査室長（DCO)：坂本静男（JHA医事委員長）
検査員（DCO)：本波節子・古谷野豊子（日本アンチドーピング機構）
マネージャー：清水　諭（愛知県ハンドボール協会）
検査員（DCO)：村井美保子・増田美穂子（JHA医事委員会）
シャペロン：近藤みのり・白川尊則・沢村さやか（中京大学）
小峠尚平・小池洋喜・深沢俊晴・森　考啓（名工大）
岩間洋介（JR東海)・塚本　光（JHA）

3）本大会の適用規則；

アジア地域内でAHF（Asian Handball Federation）が主催で実施する大会としてはじめて次の新規則を適用実施した。

① WADA（世界アンチ・ドーピング規程— 2003年6月）
② IHF（国際ハンドボール連盟）アンチ・ドーピング規則— 2005年
③ AHF（アジアハンドボール連盟）アンチ・ドーピング規則— 2006年3月

2．ドーピング検査の対象となる三つのカテゴリー；

従来はドーピング検査の対象選手は、試合終了直前の抽選による抽出方法のみであったが、本大会では、初の新規則適用による次の三カテゴリーを対象とした。

方法（IHF, AHF規則）	ドーピング検査の指定基準	ドーピング検査の指定者
抽選による抽出 (AHF3-3,IHF6-3-3-2)	その試合の登録者全員に対して、試合の終了約10分前。	AHFのDCOがチームオフィシャルのくじ引きによって決定。
レッドカードによる退場選手 (AHF3-5,IHF6-3-3-3)	異常に攻撃的、常軌を逸しているために退場宣告された選に対し、試合終了時。	AHFのDCOが試合終了時に指名
ドーピング疑惑の選手 (AHF3-5,IHF6-3-3-3)	ドーピングの疑惑がある場合。	AHFのDCO、AHF役員、レフリーが試合終了時に指名権がある。

3．本大会時のドーピング検査

1）ドーピング検査の実施結果は、以下のとおりで計9検体であり、すべて抽選による抽出であり、レッドカードおよびドーピング疑惑によるドーピング検査指定選手はなかった。

試合	KOR	KUW	UAE	QAT	JPN	小計
④ KOR × QAT	1			2		3
⑤ JPN × KUW		1			2	3
⑥ UAE × KUW		1	1			2
⑦ KOR × UAE	1					1
小　計	2	2	1	2	2	9

2）2分間退場83名、レッドカード退場12名の状況は、以下のとおりであった。

（チーム） （試合）	KOR		KUW		UAE		QAT		JPN		小計	
	2分	Red	2分	Red	2分	Red	2分	Red	2分	Red	2分	Red
① KOR × KUW	5	1	5	0							10	1
② JPN × UAE					11	2			6	0	17	2
③ UAE × QAT					2	1	5	1			7	2
④ KOR × QAT	0	0					2	0			2	0
⑤ JPN × KUW			3	2					3	1	6	3
⑥ UAE × KUW			5	0	3	2					8	2
⑦ KOR × UAE	1	0			5	0					6	0
⑧ JPN × QAT							2	0	4	0	6	0
⑨ KUW × QAT			7	0			11	2			18	2
⑩ KOR × JPN	0	0							3	0	3	0
小計	6	1	20	2	21	5	20	3	16	1	83	12

4．アンチ・ドーピング概況からみた今後の問題点

1）国際大会に対するアンチ・ドーピングに対する役員・選手の意識および経験；

熊本世界選手権大会（1998年熊本）以降、向上したが、ハンドボール競技関係からのドーピング検査の担当要員（DCO／シャペロン）の養成数が現在32名と少ないのと試合数が年間4～5回での経験では、2003年以降の世界統一機構（WADA）、日本アンチ・ドーピング機構（JADA）、文部科学省の指導監督の影響により各関係機関との調整量が増加している現況では、JHA医事専門委員会＆アンチ・ドーピング専門委員会の現スタッフのみでは追従が困難化している。速やかにハンドボール競技規則を理解している人からの適任のスタッフ増強が必要である。

2）レッドカードによる退場者の管理の困難性；

本大会から新規則を日本で適用実施したが、AHF&IHF規則共に「レッドカードによる選手が退場する時には、選手団の1名が帯同する」ことが示されているが、その主旨は試合直後にドーピング検査の指名があったときに選手のエスコートとして対応できるためであるが、その趣旨が徹底しないためにシャペロンが困惑した。

3）現在のDCO、シャペロンの新任者講習や資格保有者のJADAによる講習会は実施されるが、検査技術のみで、ハンドボール競技のみが持つコート内の専門的配慮やレフェリー・オフィシャルとの連携的処置については、別途のマニュアルによる講習が必須である。

5．感謝

ハンドボール競技・国際大会で初めての新アンチ・ドーピングがWADA・JADAの基本的規則を受け、IHF・AHFの新規則の適用下で、DCO・シャペロンが一致団結してドーピング検査が終了できたことは、ひとえに大会組織委員会の御配慮によるものと感謝申し上げたい。

AHF管理下でのアンチ・ドーピング態勢・機能・設備・編成・対応能力等でこれほどの高い水準のアンチ・ドーピング機能は筆者の12年間の経験から、日本以外では得られないでしょう。

IHFTDのMr. Alexander KozhukhovやAHFTD一同もドーピング施設のみならず、班員の配置や動きに感謝して帰国したことは、これもひとえに愛知県協会一丸となっての長期間の徹したサポートのお陰でしょう。

6．シャペロン・DCOの参加所見

1）シャペロン；

・中東の選手とのコミュニケーションに英語では困難。（岩間洋介）

・エスコートで試合終了後の日本代表選手控え室に入り、感激で感涙にむせんだ。（森　考啓）

・QAT 選手のエスコートの際、通訳が介在しているのにままならなかった。（深沢俊晴）
・ドーピング記録紙への記入事項が多く、大変。KUW ロッカーに入ったが緊張。（小池洋喜）
・ドーピング選手の存在は悪。フエアーなハンドボールを望む。（小峠尚平）
・ハンドボール競技規則、ドーピング規則ともに学習できた。感謝。（沢村さやか）
・アンチ・ドーピング意識が啓発できた。（白川尊側）
・「スポーツ界にドーピングを認めてはならない」姿勢の重要性痛感した。（近藤みのり）

2）ドーピングコントロールマネージャー所見（清水　諭）；

筆者は今大会において、ドーピングコントロールの事前の準備・調整、会期中の検査室外の諸事を管理するマネージャーという立場で参加させて頂いた。今後、同じ立場に立たれる方の為に、反省点をここに記しておく。

『会場・動線計画』

今大会では失格となったプレーヤーを待機させる専用エリアを設け、監視役として数名のシャペロンを配置した。しかし、他チームの選手や記者陣のエリアと隣接していたため多くのトラブルが発生した。

失格となったプレーヤーは精神的に不安定である場合が多く、記者などのちょっとした発言にも激昂する。これは会場・動線計画の不備であり、選手団・記者陣の管理担当者との事前調整が不十分であったと痛感した。

『失格プレーヤーの管理』

１試合平均２名の失格者が発生したが、国内大会しか経験のない筆者の予想を大幅に上回る数であった。そのため、シャペロンの人数が不足がちになり、各シャペロンに負担をかける結果となった。また、失格者に対するドーピング検査は、比較的新しい規定の為、選手レベルには十分に認識されておらず、戸惑いを見せる選手がほとんどであった。チーム役員のみならず、選手への事前通知などを徹底する必要があった。

『言葉の問題』

ほとんどのチーム役員は英語が通じるが、プレーヤーのほとんどは英語が通じず、フローを滞留させる原因となった。

上記以外にも反省点は多々あるが、特に記憶に残っている３点を記した。少しでも今後の参考になれば幸いである。

最後に、寛大な忍耐を持って筆者を指導して下さった西山先生、豊富な経験に基づき検査室を管理して下さった坂本先生、度重なる計画変更に丁寧に対応して下さった実行委員会の松原先生、拙い管理者に辛抱して下さったスタッフの皆様に、厚く御礼を申し上げたい。

3）DCO 所見（村井美保子）；

実りの多い６日間を過ごさせて頂きました。全日本チームの健闘と、地元大会スタッフの皆様のご尽力により素晴らしい大会になったと思います。

私がハンドボールに関わるきっかけとなった『2002 年全日本チームの栄養調査』を通じて出会った選手のうち数人の方が今回のメンバーにも選出されており、私にとっても大変思い入れの深い大会でした。

これまでドーピングコントロールスタッフとして５年近く携わって来ましたが、私にとっては今回が初めての国際大会でした。まず感じたのは言葉の壁であり、日頃の勉強不足を痛感いたしました。そしてレッドカードの多さに驚き、ドーピング検査の対象となるルールに基づく対応に緊迫した毎日を過ごしました。

試合直後に拘束されることで、選手は様々な負担を感じることと思いますが、ドーピング検査は選手達の負担になるべきものではなく、選手の健全な心身を守るために存在しています。私たちスタッフは選手に極力負担をかけないよう心を砕いています。施設や予算の問題もあり、選手に不自由な思いをさせてしまうことが現状として残念な点です。今後は、スタッフの増員・育成することで、一連の作業をスムーズに行うことやドーピング検査室としての機能を重視した体育館施設の建設が望まれます。

私は今後もハンドボールを応援し、微力ながらハンドボールを支える一員として携わって行きたいと考えています。栄養士として選手の栄養面のサポートや、ドーピングコントロールに関して、栄養士としての観点からアドバイスが出来れば幸いです。

4）DCO 所見（塚本　光）；

ドーピングコントロールスタッフとして動き始めてから１年が経ち、国内での実務研修は何度か行ってきましたが、国際大会は今大会が初めてでした。あのような緊張感のある会場で仕事できた事を大変嬉しく思います。ただ、幾度も言葉の壁にぶつかり、自分の力不足を痛感しました。

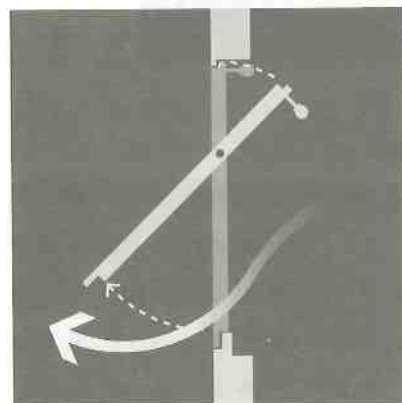
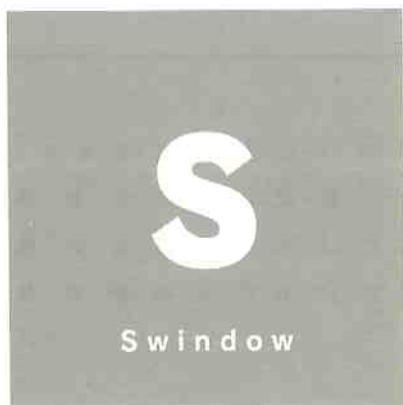
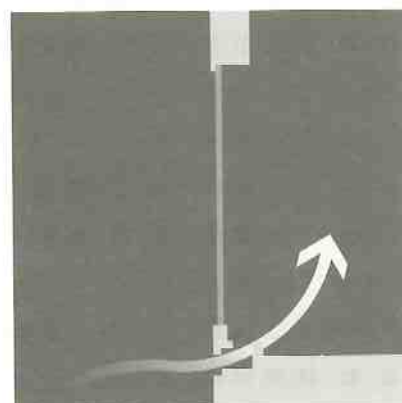
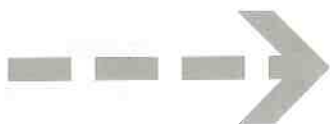
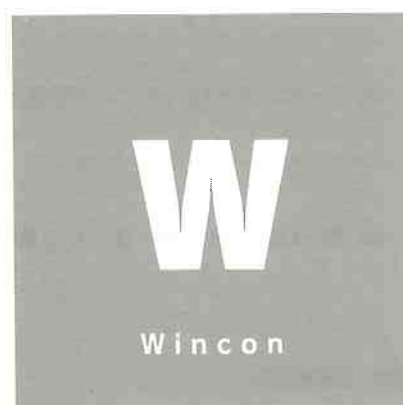
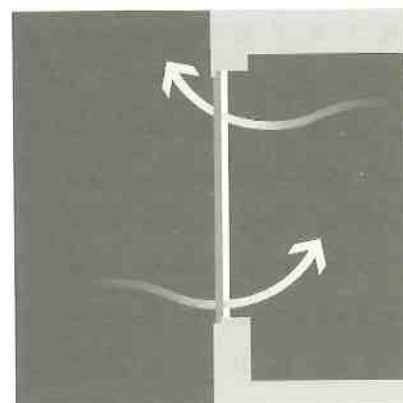
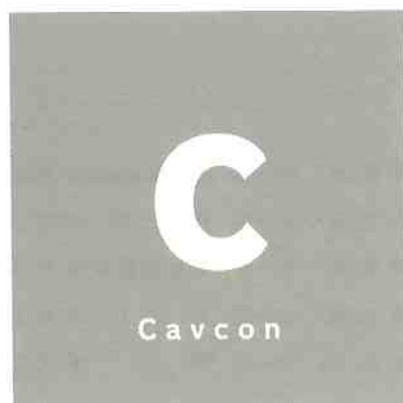
シャペロンは、試合中はベンチの後での責務や失格者待機エリアの管理を行わなければならないのですが、レフェリー（東京都）を行っている為、いつの間にか、レフェリーのジャッジ・位置・行動・仕草などに着目している私が居ました。

今大会に参加し、レフェリーには、高い技能・優れた精神・高い表現力は勿論のこと、優れたパーソナリティも不可欠であるという事を再確認できました。

今後も多くの試合を通して審判技術向上に努めると共に、ドーピングに関する講習への参加も考えています。

最後に、この度私にこのような素晴らしい機会を与えて下さった西山先生、更に会場にてご指導してくださった多くの方々、スタッフの皆様に感謝申し上げます。

（JHA 医事専門委員会・JHA アンチ・ドーピング特別委員会）

呼吸する建築

Swindow●スウィンドウ
わずかな風圧も捉えて自然に開閉し、室内外の温度差で効率の良い換気が行えるバランス式逆流防止窓。

Wincon●ウィンコン
内蔵の調節弁により、風の強弱に影響を受けにくく、定風量で換気が行えるヨコ型定風量換気スリット。

Cavcon●キャブコン
内蔵の調節弁により、強風時でも一定の風量で換気ができ、無風時でも内外の温度差による重力換気が行えるタテ型定風量換気スリット。

NAV WINDOW 21

「呼吸する建築」。それは人が呼吸をするように
建築が自然に空気を取り入れ、建物内部の空気を新鮮に保ち
不要なものを排出するシステムを持つことです。
自然換気システム＝NAV WINDOW 21は
これまでの建築の機械空調と共存し
建物を取り囲む風を読み、建物内に風の道を作りそれを状況の変化に
あわせて制御する画期的な換気システムです。

三協立山アルミ株式会社
東京本社／〒164-8503 東京都中野区中央1-38-1
住友中野坂上ビル20F〈環境商品部〉 TEL（03）5348-0367
インターネットホームページ http://buildingsash.net/

スコアールーム ①

第12回ジャパンオープントーナメント

開催期日：男子・2007年8月12日(日)～15日(水)
：女子・2007年8月12日(日)～14日(火)
会　場：大分県・大分市:県立総合体育館ほか

【男　子】

▼1回戦

HC岡山(岡山県)	32－24	ボンチフェローズ(大阪府)
FHC(福岡県)	44－10	若松クラブ(千葉県)
氷見クラブ(富山県)	26－17	FST(東京都)
洛北クラブ(京都府)	39－19	福島クラブ(福島県)
ホンダ熊本(熊本県)	48－11	FALCOM(和歌山県)
埼玉教員クラブ(埼玉県)	33－30	各務原キャロット(岐阜県)
日新製鋼(広島県)	35－25	白石クラブ(佐賀県)
香川クラブ(香川県)	44－17	古工クラブ(宮城県)
HC秋田(秋田県)	42－23	静岡県教員団(静岡県)
高知クラブ(高知県)	37－21	土浦三高クラブ(茨城県)
HC大分(開催地)	35－22	HC新潟(新潟県)
HC神戸(兵庫県)	24－22	徳山クラブ(山口県)
つくば学園クラブ(茨城県)	39－14	生駒クラブ(奈良県)
沖縄クラブ(沖縄県)	31－25	エルムクラブ(北海道)
きときとクラブ(富山県)	31－25	山形県新球会(山形県)
愛知教員(愛知県)	32－22	チーム群馬(群馬県)

▼2回戦

HC岡山	39(29－11、10－12)23	FHC
氷見クラブ	27(13－12、10－11)26 (2－0 延長 2－3)	洛北クラブ
ホンダ熊本	35(15－13、20－13)26	埼玉教員クラブ
日新製鋼	30(13－12、17－12)24	香川クラブ
HC秋田	33(18－10、15－13)23	高知クラブ
HC神戸	22(13－7、9－10)17	HC大分
つくば学園クラブ	32(15－9、17－14)23	沖縄クラブ
愛知教員	31(15－9、16－15)24	きときとクラブ

▼準々決勝

HC岡山	30(14－15、16－12)27	氷見クラブ
ホンダ熊本	34(16－12、18－8)20	日新製鋼
HC秋田	27(11－9、16－12)21	HC神戸
つくば学園クラブ	34(17－10、17－9)19	愛知教員

▼準決勝

ホンダ熊本	32(17－12、15－14)26	HC岡山
HC秋田	34(14－16、20－13)29	つくば学園クラブ

▼3位決定戦

HC岡山	42(21－12、21－13)25	つくば学園クラブ

▼決勝戦

ホンダ熊本	**42(21－13、21－17)30**	**HC秋田**

▼最終順位

優　勝：ホンダ熊本（熊本県）

準優勝：HC秋田（秋田県）

3　位：HC岡山（岡山県）

4　位：つくば学園ハンドボールクラブ（茨城県）

【女　子】

▼1回戦

HC岡山(岡山県)	37－14	ninfa·kagoshima(鹿児島県)
GET"S(兵庫県)	31－26	HC高山(岐阜県)
コスモスピッキーズ(開催地)	41－6	北海道倶楽部(北海道)
HC東京VENUS(東京都)	31－25	大農OG(秋田県)
香川銀行T・H(香川県)	48－13	御座候(大阪府)

熊本クラブ(熊本県) 23－20 かながわガビアーノ(神奈川県)

MMC(愛知県) 29－16 白梅三英美会(岩手県)

小松クラブ(石川県) 23－16 シャトレーゼHBクラブ(山梨県)

▼準々決勝

HC岡山 26（13－12、13－11）23 GET"S

コスモスビッキーズ 30（13－14、17－10）24 HC東京VENUS

香川銀行T・H 34（17－11、17－7）18 熊本クラブ

小松クラブ 25（11－6、14－9）15 MMC

▼準決勝

HC岡山 27（14－7、13－13）20 コスモスビッキーズ

香川銀行T・H 35（15－7、20－11）18 小松クラブ

▼3位決定戦

コスモスビッキーズ 26（11－13、15－11）24 小松クラブ

▼決勝戦

香川銀行T・H 35（15－6、20－9）15 HC岡山

▼最終順位

優　勝：香川銀行T・H（香川県）

準優勝：HC岡山（岡山県）

3　位：コスモスビッキーズ（大分県）

4　位：小松クラブ（石川県）

スコアールーム② 第34回全国高等専門学校選手権大会

開催期日：2007年8月18日(土)～19日(日)

会　　場：香川県高松市・高松市総合体育館

▼予選リーグ　第1ブロック

八代高専 22（11－9、11－11）20 明石高専

豊田高専 25（12－12、13－6）18 明石高専

豊田高専 24（11－14、13－9）23 八代高専

▼予選リーグ　第2ブロック

大阪府立高専 33（17－5、16－8）13 一関高専

大阪府立高専 22（9－9、13－8）17 高知高専

高知高専 29（12－11、17－17）28 一関高専

▼予選リーグ　第3ブロック

高松高専 31（15－10、16－12）22 長岡高専

高松高専 26（11－15、15－9）24 佐世保高専

佐世保高専 35（18－7、17－9）16 長岡高専

▼予選リーグ　第4ブロック

米子高専 25（9－6、16－11）17 函館高専

米子高専 24（14－7、10－12）19 石川高専

函館高専 19（9－8、10－8）16 石川高専

▼準決勝

豊田高専 17（6－6、11－6）12 大阪府立高専

米子高専 26（11－6、15－12）18 高松高専

▼決　勝

米子高専 29（11－11、18－4）15 豊田高専

▼最終順位

優　勝：米子高専（米子高専は2年連続3回目の優勝）

準優勝：豊田高専

3　位：高松高専

4　位：大阪府立高専

がんばれハンドボール10万人会「サポート会員」9月入会・継続会員

【福島】舎利弗　学　【茨城】中馬睦子　【埼玉】齋藤和也　【東京】平賀とみ子　【長野】後藤政俊

【富山】西坂真理子、越前明子　【愛知】田中基明、西　みどり、山本智子、小林　勇、足立智司、岡田洋典、牧野千別

【岐阜】米谷　渉、堀江祐司　【大阪】塩川正十郎、繁田順子　【島根】森江和吉　【岡山】竹内一平

【広島】青戸克好、木下しのぶ、藤川道子　【熊本】佐久間克彦

【11月の行事予定】

【会　議】

11月17日(土)　第2回理事会(東京)

【大　会】

11月16日(木)～20日(月)

男子49回・女子42回全日本学生選手権大会(愛知県・名古屋市)

HAND BALL CONTENTS Nov.

(登録チームの購読料は登録料に含む)

(財)日本ハンドボール協会編 『ハンドボール』第四八五号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
平成十九年十月二十六日印刷 平成十九年十一月一日発行
東京都渋谷区神南一―一―一
電話 代表〇三―三四八一―二三六一
振替 〇〇一二〇―七―一〇二九三
編集兼発行人 川上憲太
定価 年間三三〇〇円